

カンボジアにおける教育制度の歴史的変遷の考察 ーパリ和平協定以前の教育制度に見る社会的特性ー

Chankea PHIN*

1. はじめに

(1) 問題の所在と研究目的

カンボジアの教育制度および教員制度の歴史を振り返ることは、現在の教育制度や教員制度を分析する上でも有効だと考えられる。なぜならば、内戦前のカンボジアの教育制度には、カンボジアが伝統的に築き上げてきた社会制度とフランス植民地時代に導入された近代的教育制度との融合が見られ、内戦後の復興の中で、カンボジアの人々がかつての教育制度を取り戻すべく今日まで努力を続けてきたからである。そうした形跡は、現在のカンボジアの教育のなかにも垣間見られる。例えば、基礎教育における寺院の役割は、今でも無視することはできない。

現在、カンボジア政府は外国政府、国際機関、Non-Governmental Organization (NGO) 等の支援のもと、Education for All (EFA) や Millennium Development Goals (MDGs) などの国際基準を満たすべく教育の復興および開発に力を入れているが、依然として教育の質の改善など取り組むべき課題は多い。そこでカンボジア政府は、Child Friendly School (CFS) 政策を通じて、カンボジアの歴史的、社会的特性を踏まえたより効果的で実効性の高い教育開発の手法の導入を試みている。しかし、1991年のパリ和平協定以後のカンボジアの教育制度について書かれた文献が多い一方で、それ以前の教育制度について書かれた文献は少なく、こうした手法を評価する枠組みが十分ではない。

そこで、本稿では、カンボジアの教育制度における歴史的変遷を概観し、その社会的特性について明らかにすることを目的とする。この研究により、これまで

* 教育基礎学専攻 大学院生

カンボジアにおいて教育がどのような社会的な役割を果たしてきたのか、また、人々が何を教育に期待してきたのかを明らかにすることで、人々の教育への関心を高めるような教育政策の実現に資するものと考えられる。

(2) 研究の方法

本稿では、カンボジアの教育および教員に関する制度や政策の歴史の変遷について述べるが、内戦によって多くの資料が失われてしまったことから、教員に関する制度や政策に関連する資料や情報も限られている。また、これまでの先行研究についても、1991年のパリ和平協定以降に書かれた援助機関等の報告書が多く、それ以前の教育制度について書かれた論文は少ない。そのため、過去の教育制度については、カンボジアの歴史について書かれている資料などを参考にしつつ、歴史的に教育がどのような社会的役割を果たしてきたのかを時代ごとに区分し、可能な限り明らかにする。

2. 前近代における教育制度

(1) 宗教の伝来と教育

1世紀頃に建国された扶南の首都は、現在のタケオ州アンコールボレイに置かれていたと言われる。この頃の教育は主に寺院で行なわれていたが、王族や役人の子孫しか教育を受けることができなかった。当時は大乘仏教やヒンドゥー教が人々に信仰され、これら2つの宗教が教育においても重要な役割を果たしていた。例えば、仏教やヒンドゥー教の思想を学ぶ課程でサンスクリット語がカンボジアにももたらされ、言語学が発達したとされる。また、中国の書物には、モハー・テラック・サンガー・バルという人物が、サンスクリット語を中国語に翻訳したという記録も残っている (Chan, 2006a : 1-6)。

当時はヒンドゥー教の司祭であるバラモンが教師を務め、言語学、科学、宗教学などの他、作詩、太陰暦、占星術などを専門とする者もいた。学生は寺院で寝泊りし、奉仕活動を行うことが義務付けられていた (Sideth, 2004 : 92)。また、10歳から12歳までの男子しか仏教寺院やヒンドゥー教寺院の寄宿舎に滞在することができず、そこで、文字、呪術、占術、医学、経典などについて学んでいた。

6世紀ごろ扶南を併合した真臘時代も、扶南時代と同様に、王族や政府の役人の子孫以外は、教育を受けることができなかった。王族はヒンドゥー教寺院や仏教寺院で教育を受けたが、これまでに比べるとより近代的な教育を受けるようになった。主な教育の内容は行政学、政治学、宗教学などで、国を統治するための学問が行われた。また、読み書き、呪術、占術、医学などについても学んでいたが、数学の授業は行われていなかったという。その他、建築、手工芸、彫刻、大工、銀細工 金細工などを学ぶ者もいたとされる (Chan, 2006a : 11)。

当時はサンスクリット語が寺院などでは利用されていたが、一般の人々はクメール語を話していた。サンスクリット語を話す聖職者、王族、行政官とクメール語を話す一般農民との間で、一種の階級社会が存在したと考えられる (Chandler, 1998 : 22)。また、全国で143箇所¹⁾の遺跡などでサンスクリット語が刻まれた碑文などが発見されており、当時のカンボジアには、サンスクリット語の文字の読み書きができ、建築技術にも優れた人々が数多くいたことを示している。また、こうした遺跡や碑文のほか、経典などを保存するための施設 (経蔵) が寺院に残されていることは、教育が寺院で行われていたことを示す貴重な証拠であると言える。

(2) 上座部仏教の浸透と価値の形成

その後続くアンコール王朝時代における教育に関する制度は明らかになっておらず曖昧であるが、前時代と変わらず寺院が依然として教育を行う場所であったと推測されている。当時の様子が石碑に刻まれたものが250箇所²⁾で発見されていることやアンコールワットに代表される極めて高い建築技術によって立てられた寺院等から、この当時の教育が極めて高い水準にあったことが推測できる。特に水利技術は極めて優れており、元朝からの使節に同行して1296年にアンコール朝を訪れた周達観は、カンボジア人が三毛作を行っていたと言及している (石澤、1996 : 22)。また、この頃になると、古代クメール文字も発達し¹⁾、現在利用されているカンボジア語の起源となった。そして、文字の発達は、教育や文化の発展を促したと考えられる。周達観によれば、僧侶が一般信徒に対して教育を行なったことが記されている (Ayres, 2000 : 12)。それまでは主に王族や政府の

役人が教育の対象であったが、この頃になると一般の人々も僧侶の見習いとして教育の機会を得ることができるようになってきた。このように、一般の人々にも宗教的な価値観が教えられるようになった背景には、人間は不完全なものであり、神や王の庇護により社会が成り立っているという思想があり、一般の民衆は伝統を重んじることで社会の一員となることが求められたからだ、Ayres (2000) は指摘している。

国家を統一したアンコール王朝であるが14世紀には衰退し、1529年にロンヴァエク（現在のコンポンチュナン州）に遷都された後、王族や政府の役人はそれまで信仰されてきたヒンドゥー教や大乘仏教ではなく、12世紀にスリランカから伝わったとされる上座部仏教を信仰するようになった。そして現在に至るまでカンボジア人の多くが上座部仏教を信仰し、文化や生活様式もこの頃のものが現在にまで伝わっている（北川、1996:24）。上座部仏教が信仰されるようになってからは、寺院がカンボジアの教育に重要な役割を果たしてきた（Chan, 2006a:21）。この当時のカンボジアの教育制度は、学校教育ではなく寺院が地域社会の教育機関として大切な役割を果たし、僧侶が無給の教員として教育を行っていた（Chan, 2006b:108）。また、Sideth (2004) は、寺院での教育が普及した結果、伝統的、文化的教義は、より社会的で、教養や責任感があり、勤勉な国民性を形成してきた一方で、女性は家事を司るという固定観念を植え付けたと指摘している。上座部仏教の教えでは、男性と女性にはそれぞれに従うべき慣習があり、カンボジアの古くからの諺で「美は女性の富、知は男性の富」と言われていることに象徴されるように、女子に対する教育は歴史的、宗教的、社会的に軽視され、こうした状況は現在に至っても十分には改善されていない。

（3）前近代に見られる教育と宗教の関係性

この当時、教員の役割を果たしていた僧侶であったが、僧侶は教員としての指導法を学ぶ機会もなく、計画的な学習はなされていなかった。そのため、寺院での教育は、見て覚えるという方法で行われた。また、寺院では、僧侶が子どもたちにカンボジアの經典の読み方を主に指導していた。その影響は、現在の暗記中心の教育にも見られると前田(2003)は指摘している。さらに文字や經典以外にも、

口承文学や叙述詩などを通して仏教的道徳、伝統が人々に教えられ、大工等の日常生活に生かすことができる職業訓練も行なわれていた (Ayres, 2000 : 12-13)。

上記のような記述から、この頃の教育の目的は、僧侶が中心となり仏教的概念を一般民衆に広げることで、王を中心とした権力構造を維持、強化することであったと考えられる。教育を受けることができるのは、見習い僧として寺院に在る間だけであったため、一般の人々の識字率は極めて低かったと考えられているが、伝統的な掟、物語、昔話などが僧侶によって口承で伝えられることで、人々は宗教的かつ社会的な概念を身につけていった。また、口承で伝えられた数々の物語や昔話は、椰子の葉に書かれて寺院に保管されていたが、文字を読めるのは僧侶だけであり、どの物語を民衆に語るのかは、僧侶の裁量に任されていた (Ibid : 13-18)。

こうしたことから、僧侶には特別な社会的地位が与えられたと考えられ、教育と宗教が一体化していたことが分かる。現在の教育政策の中においても仏教的価値を重視した教育の実施が進められており、多くの学校が寺院の敷地、もしくは、寺院の近くに建設されている²⁾ ことから、制度化された公教育と人々の生活に根付いている宗教の役割を一体化したものとして考える人々が多いことが分かる。

3. フランス植民地時代の教育制度 (1863 ~ 1953 年)

(1) 近代的教育制度の導入

フランス・カンボジア間保護条約が締結された後の1867年、首都が現在と同じプノンペンに移され、1873年には、王族や政府の役人の子孫を教育するための学校がプノンペンに設立された (Ayres, 2000 : 23)。1893年には植民地政策を進めるためのカンボジア人の教育機関として保護領大学 (College du Protectorate) がシソワット高校 (Lycee Sisowath) に先駆けて設立された (Ibid : 29)。このようにフランス植民地政府は、カンボジアにおける植民地政策の一環として政府の高官などを養成するためのエリート教育を推進した。

フランス植民地政府は、教育の近代化を進めるために、1906年に教育改善委員会 (The Education Improvement Board) を組織し、カンボジアの教育制度の体

系的な確立を行なった。農村部では、寺の敷地に設置された寺院学校と集落の中に設置された村落学校が公立の学校とされ、伝統的に寺院学校で教鞭をとっていた僧侶への教員研修も実施された。また、都市部では、各州都に公立の学校が設置され8歳以上の男子は学校に通うことができるようになった。そのほか、行政官を養成するための高等教育機関である統治学校が設置された。この統治学校はフランス植民地政府の直轄の教育機関であった(Chan, 2006b:88)。このように、これまで地域ごとに運営されていた教育制度を活用しながら、最終的には選ばれたものがエリート教育を受けることができるシステムを導入し、地方の農村部にまで植民地支配の一元化を進めた。

(2) 近代的教育制度の確立

その後、1911年11月10日³⁾にフランスの保護政策の下、シソワット王が義務教育に関する政令を始めて発令した。これにより、カンボジアで始めて義務教育が制度化された。その国王政令によると、①すべての寺院学校でカンボジア語を利用すること、②8歳以上のすべての子どもは就学すること、③寺院の住職が教育の内容を決定し、読み書き計算を教えること、④地域の住民の代表者はこれらの学校のモニタリングを行い政府に報告すること、などが義務付けられた(Chan, 2006b:72; Fergusson and Masson, 1997:95)。また、同年、プノンペンに女子学校が開校され、制度上は女子も公的な教育が受けられるようになった。しかしながら、一般的には女子教育は依然として軽視され、上述の国王政令でも女子教育の義務化については述べられなかった(Chan, 2006b:92)。さらに、1911年には、カンボジア教育省が設置され、カンボジアに近代的教育制度が確立され、翌1912年4月11日には、義務教育を怠った場合の罰金⁴⁾についての国王政令が出されるなど義務教育としての制度が強化された。また、学校の教員としての役割を果たしていた僧侶は、歴史、地理、算数などについての書物を編纂し、各学校へ配布することを求められた(Bilodeau, 1955)。

さらに、1916年10月19日⁵⁾には教育政策に関する3度目の国王政令が出され、事実上、男子の6年制義務教育を進めた。これにより、1～3年生までは寺院学校に通うことができたが、4～6年生はフランコ・クメール小学校で学ばな

ければならなくなった。こうして、公的な教育としての地位を確立したフランコ・クメール小学校であるが、学習内容のほとんどはフランスの文化、道徳、地理、歴史などであり、カンボジアについての授業は極めて少なかった。そのため、カンボジアの人は自国の文化や歴史について学ぶ機会がなかった（Chan, 2006b : 72-75 ; Clayton, 1995 : 6 ; Bilodeau, 1955 : 17）。このように、植民地支配を効率的に進めるために教育を重視した一方で、エリート層が増加することによって、ベトナムで起きたような社会主義革命がカンボジアでも起こることを植民地政府は恐れていた（Chan, 2006b : 81）。そして、その権力を維持するために、意図的にカンボジアの人々に適切な教育を与えなかった（Sideth, 2004 : 92）、との指摘もある。その結果、フランス植民地政府は、カンボジアの小農の開発や近代化には無関心であり続けた（Ayres, 2000 : 30）。さらに、1918年、インドシナ総督の Albert Sarraut により新教育政策が提案され、インドシナの国々の学生も 6 - 4 - 3 制の教育を受け卒業試験に合格すれば、フランスの大学へ進学できる道が開かれた。しかし、フランスからの独立を目指していたカンボジアにおいては、フランス式の教育制度に関心を持つ者は少なく、この政策は成果を出すことができなかった（Chan, 2006b : 93 ; Fergusson, 1997 : 96 ; Bilodeau, 1955 : 18 ; Ayres, 2000 : 23）。

（3）近代的教育制度と伝統的価値の融合

これらの結果、フランス植民地政府の教育制度はカンボジアの農村に暮らす人々の生活にはほとんど影響を与えなかった。教育プログラムはフランス人の Baudoin M. と Menetrier M. が世俗的な教育と仏教的な教育を融合して作り上げたものであり、しかも、公式な指導が行なわれていなかったため、その内容は継続されず（Ayres, 2000 : 23）、形式上の教育制度は整備されたものの、カンボジアの多くの人々は伝統的な寺院学校に通い、僧侶から教えを受けることを選んだ。しかし、寺院学校で教員をしている僧侶は教えることに慣れておらず（Chan, 2006b : 91 ; Clayton, 1995 : 11）、指導能力や文字の読み書きの能力も不十分であったため、学習は暗記中心で行われていた（Chan, 2006b : 91）。こうしたことから、寺院学校は十分な基礎教育の機能を果たしてはいなかった。それでも、農村の子

どもたちが学校へ行くことができたという点で、当時の教育において極めて重要な役割を果たしていたと言える。その後、教育制度の近代化は進んだものの、実際には伝統的な寺院を中心とした教育制度が残り続けることとなった。そして、現在に至る戦後の教育復興における近代的な教育制度の導入にあたって、こうした事実を無視することができないのではないかと考えられる。

4. カンボジア独立以降の教育制度（1953年～1979年）

（1）近代国家形成のための教育とその挫折

1941年にシハヌーク国王が即位すると、フランスからの独立を目指す動きが活発化したが、教員養成に関する政策は十分に機能せず、成人識字率の低さ、女子の就学率の低さ、教育機関等の不足、適正な教育を受けた教員の極度の不足などの問題を抱えたまま、フランス植民地時代は終焉を迎えることとなった。

1953年にフランス植民地からの独立を果たしたシハヌーク国王は、仏教社会主義というイデオロギーのもと、教育の改革に力を入れた（Chandler, 1998: 199）。当時の教育支出の国家支出に占める割合は1954年が12.3%、1955年が12.1%、1959年には22.54%（Fergusson, 1997: 99-100; 前田, 2003: 33）と大きな部分を占めていた。こうした手厚い教育政策により小学校が地方の遠隔地までに設置され学校の数は徐々に増加した（Chan, 2006b: 152）。その結果、人々は教育に対する関心を強め、児童・生徒・学生が年々増加した⁶⁾。

新政府の教育政策は、インフラの整備による教育の量的拡大と教育の質の改善の双方を中心に据えて行なわれた（Ayes, 2000: 78）。人的資源に関する計画は、社会的、経済的計画の根幹をなすものとして関心を集め、社会開発における教育の役割は、質の高い労働者を生み出すことが前提となっていた。1963年12月には、シハヌーク国王が教育に関する協議会を立ち上げ、教育の質の改善に着手した。この協議会の最重要課題は、実践的な小学校のカリキュラムの導入であった。また、それに続く課題は、教育の質を改善するための教員不足を改善することであった（Ibid: 48-49）。当時のカンボジアでは、学校数の増加に伴い、教員の数の不足が顕著となっていた（Fergusson, 1997: 96）。

また、人的な課題としては、当時のカンボジアでは、小学校や中学校ではクメー

ル語が使われていたにも関わらず、教員養成校ではフランス語が使われ、教員たちはフランス語で教育を受け、高校や大学では、フランス語もしくはロシア語が使われていた (Ibid : 104 ; Ayres, 2000 : 53)。こうした課題を抱えながらも、国内で高等教育を受けることができるよう、新政府は1964年に王立プノンペン大学を開校する等、高等教育も含めた教育制度の確立を推し進めた (Ayres, 2000 : 50)。

しかしながら、このような政策は長くは続かなかった。まず、教員を養成するための教官の不足のため、教員養成が十分に行なえなかった (Chan, 2006b : 164-165)。また、養成された教員たちも遠隔地や僻地での勤務を好まず、派遣されてから2 ~ 3年のうちに彼らの故郷へ戻ってしまった (Chan, 2006b : 107)。こうしたことから、結果的に教員の質も量も十分に確保することができなかった。さらに、高等教育においても、特に大学では実質的な研究などはなされず、クメール語で書かれた学術論文や文献はほとんど作成されておらず、近代学校教育を受けた人材を活用する社会経済基盤が整備されていないことも問題であった (前田, 2003 : 33)。その結果、高等教育を受けた多くの人々が待遇の良い職につくことができず、結果的に彼らの苦境の矛先はシハヌーク国王に向け、共産主義運動へ入る者もいた (Chandler, 1998 : 199)。

(2) 内戦による教育システムの崩壊

病気治療のためシハヌーク殿下がフランスで静養中であった1970年3月18日、親米派のロン・ノル将軍によるクーデターが発生し (Ayres, 2000 : 66)、ロン・ノル将軍は、カンボジアの歴史上で始めて、世襲的な王制を廃止した (Sideth, 2004 : 95)。フランス植民地時代においても、国王政令によって教育に関する政策が出されるなど、カンボジアでは歴史的に教育は国王の名の下に行われるものであったが、これ以降、王制そのものが否定される教育が行われるようになった。

ロン・ノル政権からの支持を受けた米軍は、共産主義の拡大を防ぐために密かにカンボジア領内の爆撃を行なった。村々は破壊され、多くの住民の命が失われ、戦禍に巻き込まれた人々は難民となって都市部に逃れた。学校は破壊もしくは閉鎖され、教育活動そのものが困難になっていった (前田, 2003 : 34)。この

ような混乱によって、親米ロン・ノル政権に対する人びとの不満は高まり、ポル・ポト（サロト・サル）が率いるカンボジア共産党（the Communist Party of Kampuchea: CPK）への民衆の支持が広がっていった。そして、1975年4月17日、カンボジア共産党軍がプノンペンを占領して民主カンブチア政府を樹立し、極端な共産主義を推進した（Clayton, 1998: 1）。新政府は50万人から100万人とも言われる都市住民を農村に強制移住させ（Ayres, 1999: 209）、過酷な労働を強い、人々は飢餓に苦しみ、病気の蔓延などによって多くの命が失われた。その結果、教員や生徒の多くが命を落としたといわれ、ポル・ポト政権時代を生き延びた小学校教員は僅か2800人、中学校教員はわずか207人であったと言われる（内海、1996: 193-194）。

1977年には小学校の就学年齢程度に相当する子供達は親たちから引き離され、農場に付属した学校で集団のキャンプ生活を送ることを余儀なくされた。そこでは、農作業の少ない乾季のみ1日2～3時間の授業が行なわれ、初歩的な読み書きと手作業を教えられたが、多くの場合イデオロギー教育に重心が置かれ、子どもたちは帝国主義を否定する共産主義思想を教え込まれた。その為、読み書きや計算は殆どできるようにならなかった（内海、1996: 194; Ayres, 1999: 206）。ポル・ポト政権誕生以前から農村に住んでいた年配の農民などが教員を勤めたが⁷⁾、彼らは教員としての研修も受けておらず、また外国の考え方や教材等も利用することができなかったため、極めて原始的な教育が行なわれていた（Ayres, 1999: 214）。

（3）教育の政治化

上記にみるように、植民地支配後の国家権力をめぐる争いの中で、教育は政治的に利用されるようになった。Chandler (1998) はシハヌーク国王が独裁的な政治を行っていたとしているが、シハヌークは自らの政治的理念に従い、近代的な教育の導入を試みた。また Ayres (2000) は、基礎教育に対する民衆からのニーズを満たす為に、他の東南アジア諸国やその他の途上国でも、当時のカンボジアと似たような教育政策がとられている、と指摘している。つまり、シハヌークは民衆からの支持を得る為の一つの政治的な道具として教育を利用していた側面が

ある。そして続くロン・ノル政権は、カンボジアの歴史上初めて、王制を廃止した。それまで仏教や王権思想の伝来以来、フランス植民地時代を経てもなお、教育は国王の名の下に行われてきたが、ここで初めて、教育と王権思想が切り離された。

続くポル・ポト政権は、過去の否定にも乗り出した。政権幹部であったキュー・サンファンは、「学生は、現実から乖離している。すべての教育は、外国の書物や外国の基準で行なわれてきた」として、新たな教育システムの導入を主張した。また、ポル・ポト自身も1978年のインタビューの中で、「伝統的な概念における学校も、教育機関も、大学も存在しない。なぜならば、我々は過去のすべての遺物を消し去ることを望んでいるからである」と発言している (Ayres, 2000 : 205 & 209-210)。つまり、ポル・ポト政権は、過去を完全に否定し、思想的な再教育を行うために教育を利用した。古来カンボジアでは、教育は王権とそれを支える宗教との密接な関係の中で、社会的秩序、価値の形成に貢献してきた。そうした民衆の価値は、近代的な教育制度の導入を試みた植民地時代を経ても保たれてきたが、内戦により、それらは否定されることとなった。

5. 内戦後の教育制度 (1979年～1991年)

(1) 自由と平和の象徴としての教育

ポル・ポト政権の崩壊後、国内の状況は不安定ではあったが、新政権は新しい国づくりの中で教育政策を重視した。ヘン・サムリン書記長は、1979年9月27日に「歴史的な」学校の再開を行った (MoE, 1985 : 9 ; Ayres, 1999 : 208 ; Unicef, 1990 : 79)。また、1981年5月に開催された第4回カンボジア人民党大会では、学問と実践、学校と生産的労働者、学校と社会をつなぐこと目的として、一般教育、前期高等教育、高等教育、および専門学校の再興を行うことを決定した。しかし、約10年に渡る内戦の結果、カンボジア国内の識字率は著しく低下し、教育省の調査によれば、1981年の時点で識字率は僅か14%、100万人以上の成人が文字の読み書きをすることができなかった (MoE, 1985 : 17)。それゆえ、新政権にとって識字教育が何より最優先の課題であった (UNICEF, 1990 : xiv & 91)。さらに、生産協同組織、青年、戦闘員の代表、副代表のための教育を行うため人民の力を結集すること、政治的資質と技術を持った教員の研修を実

施することなど、教育者や社会のなかでリーダーシップを担うことができる人材を重点的に育成していくことが宣言された（MoE, 1985 : 19 ; UNICEF, 1990 : 79 ; Sideth, 2004 : 93）。

このようにポル・ポト政権からの解放から間もない時期に学校を再開し、また、教育の強化を新政権が強調していることは、教育を受けられることがポル・ポト政権からの解放、つまり、自由と平和の象徴であることを示していると言える。そのため、誰もが教育を受けることができる社会を築くことがより重要であったと考えられる。教育は、まさに国民のアイデンティティを形成し自立した国家を作り上げるために極めて重要であったと同時に、過去からの解放という象徴的な意味を持っていたと考えられる。さらに注目すべき点は、教員に政治的資質、すなわち、自らよい社会を築いていこうとする資質を求めていることである。これまでのフランス植民地時代における教員やポル・ポト時代における教員のように、支配者の意志を伝える伝達係ではなく、一人ひとりが考えながら自発的な発想を持った人間を育成することを目指したと言える。

教育を再開したヘン・サムリン政権は、小学校4年、中学校3年、高校3年の4-3-3制の教育制度を採用した⁸⁾。しかしながら、ポル・ポト派は依然として中国の強力な支援を得てゲリラ活動を続けており、しかも、ベトナムの傀儡政権であるとして西側諸国からの援助が停止した状況の中で、カンボジアの復興は遅々として進まなかった。その結果、1979年に5,290校の小学校が再開されたにもかかわらず、1983年には小学校の数は3,005校まで減少した。

また識字教育・初等教育を実施するにあたり、必要な教員を養成することは急務であった。内戦で多くの教員を失ったことから、新たに教員を採用する必要があった。教員の採用に当たっては、生き残った知識人・旧教員の中から人材を選び、1ヶ月から2ヶ月半程度の短期研修プログラムを実施し、研修修了者は、教育省本省および地方の教育行政官・教職員・教員養成校の指導教員に任命された。当時は、読み書きできる者ができない者に教えるのが精一杯の状態であり、「事実上、街角や村の小道にいた人々に3～6週間の短期研修を実施して教員にした」と言われるほどであった。こうした状況の中、安定的に教員を確保するために、1981年までにプノンペンでは教員養成校と高等師範学校（現在の王立プノン

表1 1980年代の全国の小学校の状況

年度	児童数	教員数	学校数	児童 / 教員	児童 / 学校
79/80	947,307	25,526	5,290	37.1	179
80/81	1,328,053	30,316	4,484	43.8	296
81/82	1,538,838	31,884	3,521	48.3	437
82/83	1,597,018	32,859	3,114	48.6	513
83/84	1,504,839	36,520	3,005	41.2	501
84/85	1,367,089	35,665	3,133	38.3	436
85/86	1,315,531	35,080	4,009	37.5	328
86/87	1,294,227	36,754	4,284	35.2	302
87/88	1,279,053	37,292	4,780	34.3	268
88/89	1,333,368	38,056	4,749	35.0	281

出典：UNICEF（1990）p.90より作成。

ペン大学)が再開し、地方では20の州教員養成校が設置された。また1983年以降は、教員養成の基準が強化された。しかしながら、教員を指導する教官が不足していたため（UNICEF, 1990：xiv）、教員数や教員養成校での修学者数は増加したものの、教育内容や授業法などにおいて質的な向上をみることはなかった。そして1979年以降、カンボジアのほとんどの行政部門はベトナム人顧問による指導下に置かれ、教育分野だけでなく、すべての政府機関において州、市、町、村レベルに至るまでベトナム人顧問が配置されており（KHLOK, 2003：384-387）、初等教育・中等教育の教科書は、ベトナムの教科書の翻訳か、ベトナム人専門家の検閲を受けたものであり、高校ではベトナム語かロシア語が必修科目であった（前田, 2003：35-36）。つまり人材の不足により、カンボジアが独自に教員を養成することさえ難しい状況であった。

（2）国民による教育の復興

その後、徐々に教育の復興が本格化していった。1982年までに語学学校、普通科高校、専門研修センター、カンボジア・ソビエト友好高等技術学校等の高等教育機関が設置され、1985年には経済研究所が語学学校の付属機関として設置された（MoE, 1985：21）。こうした政策により、政府は、教育、経済、産業を一体的

に発展させることに尽力した。また1985年5月に開催された第5回カンボジア人民党大会では、識字教育の実践と識字率の改善こそが新しい国づくりを可能にするという考え方が明確に示された。ここでは教育に関する以下の方針が宣言された。

- ・ 文字の読み書きができる者は、文字の読み書きのできない者に教えよ。
- ・ 高い知識を持つ者は、知識が不足する者に教えよ。
- ・ 仕事がある者は、より働け。仕事のない者は、より学べ。

出所：MOE (1985), p.18より抜粋。

教育制度は整備されてきたものの、教育を行なう人材が不足していたことが上記の宣言からも明らかである。また、すでに労働についている者はより労働に専念し、国の社会経済の復興を進めることを奨励した点において、手当たり次第に識字教育や初等教育を行なっていたこれまでとは違って、一つの戦略性が見られるようになったと言える。また、第5回カンボジア人民党大会では、今後の教育政策の方針として以下の点が挙げられた。

① **新社会主義教員研修 (New Socialist Teacher Training)**

自ら意思決定を行なうことができる人材の育成、教員養成制度の体系化。

② **基礎的な設備、教材の確保**

「国と国民が共に築く」を合言葉に、学校建設や学校設備・備品（机、椅子など）の製作を行い、教育インフラを充実させる。

③ **教育行政組織の強化**

中央から地方に至るまで連携を強化し、少なくとも、すべての教職員が基礎的な教育政策について学ぶ。

④ **真の革命勢力の確立**

国際教員シンジケート (the Federation of International Teacher Syndicates) を合法活動と見なすことや青年協会 (Youth association) や指導的な人材を育成する。

MoE (1985), pp. 24-30より抜粋。

それまではベトナム人顧問が政策に関与していたが、上記の方針からはカンボジア人自身が中心になって教育政策を進めていくこと、そして、そのために人々の連帯を強化することが謳われている。また、注目すべき点は、学校の建設や備品等の製作への協力を民衆にも呼びかけている点である。1988年には、カンボジア教育省の予算が1億6千万リエル（約84万米ドル）であったのに対し、地域住民から8千万リエル（約42万米ドル）の拠出があったとの報告もある（UNICEF, 1990: 89）。このように民衆が積極的に教育の復興に参加した。

1986年からは、5年間の小学校教育制度が導入された。これは無償かつ義務教育で、それに続いて、中学校3年間、高校3年間が設置された。義務教育は中学3年まで延長することが望まれたが、小学校でさえも就学率はプノンペンで90～95%、地方都市で85～90%、地方の町などで70～80%、農村部や僻地では30～40%程度に過ぎなかった（Ibid: xiii & 80）。また、教員養成については、1週間から4ヶ月間と研修期間が延長された。教員養成研修の内容は、指導技術や教育方法論ではなく、一般知識に関する研修が中心であった。1983年以降は、小学校および中学校教員の養成期間が1年間、3年間、4年間と徐々に延長されたが、教員の多くは、教職以外の副業から収入を得なければ生活ができなかった。こうした待遇が教員の新規採用や雇用の維持を困難なものとしていた。

（3）教育の復興と課題

このように、国民を挙げて教育の復興に取り組んできたヘン・サムリン政権であったが、人材やインフラ、教育予算の不足などが教育復興の大きな妨げとなった。その後、1991年にパリ和平協定が締結されると西側諸国からの援助が再開され、外国人の専門家が主導して教育政策を立案し、外国からの資金により学校建設などのインフラ整備が進むこととなった。ここで再び、教育が民衆の手から離れていった。

筆者が2011年8月にカンボジアで行った聞き取り調査で、学校の近隣住民が、「外国の支援で校舎を建設してから、村の人は助け合わなくなった。以前は住民が学校を建設したり、修理したりしていたが、今は少し校舎が壊れただけも、ドナーに修理を依頼するようになった」と述べていたことに象徴されるように、教

表2 時代ごとの政治、宗教、教育の状況

時代区分	政治体制	宗教の役割	教育の役割
①近代以前	絶対王政	仏教信仰による王権の神格化	一般民衆の教化
②植民地時代	植民地主義	仏教を制限しながら容認し秩序を維持	エリート育成と農村社会の近代化
③内戦混乱期	独裁政治	宗教を否定*	プロパガンダ
④内戦後復興期	社会主義	仏教復興を通しての社会再興	識字教育や基礎教育の実施
⑤パリ和平以後	民主主義	仏教の国教化	経済、産業発展に寄与する人材育成

*シハヌーク時代には、仏教社会主義であった。出所：筆者作成。

育の復興への人々の参加意欲は低下している。自由と平和の象徴として人々が取り組んできた教育の復興は、今援助への依存という形で行き詰まりを見せている。

教育の水準を国際的なレベルに引き上げ、人々が教育を受ける権利を担保することは国の政策として極めて重要なことであるが、その教育制度をどのように築いていくのかというプロセスについて、今、もう一度、検討する必要がある。本稿で述べてきたように、教育がカンボジアの社会で歴史的にどのような役割を担ってきたのかを再検討することが、一助となるのではないかと考えられる。

6. おわりに

カンボジアにおいては、古くから教育と宗教が一体的に行なわれてきた。そして、そうした道徳的価値観は、現在の Child Friendly School 政策など現在の政策の中にも取り込まれており、社会的な規範や価値観を形成する上で重要な役割を担っている。その一方で、そうした宗教的価値観が、女性軽視の価値観も生み出してきたとの指摘や暗記中心の教育方法を定着させたとの批判もあった。本稿では、カンボジアの教育制度について前近代から振り返ってきたが、そのことにより、カンボジアでは教育が神聖なもの、即ち、王権や宗教と深いかわりを持ってきたことを明らかにした。さらに、近代的教育制度を導入したフランス植民地政府も、そうした教育の「神聖さ」を完全に否定することなく、民衆の価値観と

いう現状に合わせて融合を試みてきた。

しかしながら内戦を経て、教育は「神聖さ」を失い、政治的に利用されるようになった。その後内戦が終わり、人びとはかつてあった教育を復興すべく、コミュニティの中心となる学校と寺院の再建に努めてきたが、そうした取り組みは外国から流れ込んだ援助によって勢いを失ってしまった。そして、民主主義が導入された現在では、選挙での得票を目的として政治家が個人寄付によって学校建設を行なうケースが多い。本来、学校の建設は行政の責任で行なわれるのが一般的であると考えられるが、与党の政治家が学校を寄付するという行為は、自らの行政能力の低さを示すものであり、極めて矛盾した行為であると言える。しかし、これが例え政治家個人の寄付であったとしても、学校建設を評価する住民が極めて多い⁹⁾。つまり、援助の対象となった教育が、政治的に利用されるという段階にまで達している。

しかしその一方で、現在でも学校は寺院の敷地内やその近隣に建設されることが多く、学校を運営する学校委員会のメンバーに寺院の関係者が選ばれるケースが多い。2011年8月に筆者が行った聞き取り調査において学校委員会のメンバーで寺院の檀家代表を務めていた住民は、以下のように述べている。「政府の政策により、学校は教育省、お寺は宗教省が管轄するようになった。しかし、学校はお寺の近くになれば、教育機関としての機能を発揮することはできない。お寺での教育は、仏教的道徳を教えること、学校での教育は、一般的な知識を教えることである。」この言葉に表されるように、依然として、教育と宗教は一体であるべきである、という認識を持った人々がいる。

カンボジアの教育は、未だ、復興の過程にある。就学率等の改善が見られる一方で、高い中途退学率¹⁰⁾や都市部と農村部での教育格差の問題など、多くの問題を抱えている。とりわけ、中途退学率の高さは、人々の教育への期待と現実のギャップを示すものと言える。校舎等の教育インフラの整備が進むことで教育へのアクセスが改善する中で、教育の質の改善を急ぐ必要がある。そのとき、地域住民が学校の運営に参加することは極めて重要であり、学校が地域の教育機関として機能することが重要である。そうした観点からも、本稿で取り上げてきた教育の社会的な特性が生かされ、再び人々が教育に社会的役割を期待できるように

なることが望まれる。

【注】

- 1) 古代クメール文字の起源は南インドの文字であると言われている。クメール語の文字は、南インドから伝わった文字が変形したものである言われる。これらの文字も遺跡や碑文などに刻まれているが、もっとも古いものでは西暦612年と記されている（上田、1996、109頁）。
- 2) MoEYS (Feb 2012) , *Education Statistics & Indicators 2011-2012*によれば、全国の小学校6,849校のうち、1,023校が寺院の敷地内に設置されている。また、それ以外の小学校も寺院の近くに設置されていることが多く、地域住民の代表によって作られる学校支援委員会のメンバーに僧侶もしくは寺の檀家代表が入っていることが一般的である。
- 3) Fergusson L.C. and Masson (1997)およびBilodeau C., Pathammavong S., and Hong L.Q. (1955) には1906年であると記載されている。
- 4) この時の国王政令によれば、親が子ども寺院院学校へ行かせなかった場合、1～2リエルの罰金規定が設けられていた。
- 5) Fergusson L.C. and Masson L.G. (1997 : 95) では1915年であると記載されている。
- 6) 1952年には小学校が2,223校 / 児童数197,957人だったが、1969年には4,034校（45%増加）/917847人（78%増加）となった。また中等学校については、1952年に5校 / 生徒数1,952人だったが、1969年には148校（97%増加）/111,063人（98%増加）となった（Chan, 2006b : 153）。
- 7) ポル・ポト政権は都市住民を新人民と呼び、多くは重労働を与えられ、粛清の対象となった。一方、農民などは旧人民と呼ばれ、自分の土地で農業を続けることを認められた者もいた。
- 8) 学校教育制度は、1979-1986年は4+3+3、1986-1996年は5+3+3、1996年以降は6+3+3と変更されている（MoE, 1985 : 8 ; MoEYS, 2007 : 2）。
- 9) International Republican Institute が2008年に行なった意識調査では、77%の人が国は良い方向へ向かっていると回答し、そのうち63%の人がより多くの学校が建設されたためと回答している。
- 10) MoEYS (Mar 2012) によれば、2010/2011年度の純就学率は92.9%であったが、MoEYS (2011) *Education Statistics & Indicators 2010-2011*によれば、2009/2010年度の小学校6年生までの残存率は61.2%であった。

【参考文献】

Ayres D. (1999). *The Khmer Rouge and education: beyond the discourse of destruction*,

HISTORY OF EDUCATION, VOL.28, NO.2, pp. 205-218.

- Ayres D.M. (2000). *Anatomy of a Crisis: Education, Development, and the State in Cambodia, 1953-1998*, University of Hawaii Press, Honolulu.
- Bilodeau C., Pathammavong S., and Hong L.Q. (1955). *Compulsory Education in Cambodia, Laos and Viet-Nam*, UNESCO Switzerland.
- Chandler D. (1998). *A HISTORY OF CAMBODIA, SECOND EDITION, UPDATED*.
- Clayton T. (1995). *Restriction or Resistance? French Colonial Educational Development in Cambodia*, Education Policy Analysis Archives, Volume 3 Number 19 ISSN 1068-2341.
- Clayton T. (1998). *Building the New Cambodia: Educational Destruction and Construction under the Khmer Rouge, 1975-1979*, History of Education Society Quarterly, Vol.38, No.1, pp. 1-16.
- Chan, Roth Sopha (2006a). *History of Education in Cambodia, Part 1*. Phnom Penh: Cambodia. (クメール語資料)
- Chan, Roth Sopha (2006b). *History of Education in Cambodia, Part 2*. Phnom Penh: Cambodia. (クメール語資料)
- Fergusson L.C. and Masson L.G. (1997). *A culture under siege: post-colonial higher education and teacher education in Cambodia from 1953 to 1979*, HISTORY OF EDUCATION VOL.26, NO.1, pp. 91-112.
- Kraan A.V.D. (2009). *Murder and Mayhem in Seventeenth-Century Cambodia*, Chiang Mai.
- Ministry of Education : MoE (1985). *Educational Realizations 1981-1985*, Phnom Penh.
- Ministry of Education, Youth and Sport: MoEYS (2007). *Child Friendly School Policy*, Phnom Penh: MoEYS.
- MoEYS (2011). *Education Statistics & Indicators 2010-2011*, EMIS Office, Phnom Penh.
- MoEYS (Feb 2012). *Education Statistics & Indicators 2011-2012*, EMIS Office, Phnom Penh.
- MoEYS (Mar 2012). *National Congress on Educational Achievement for Academic Year 2010-2011 and Planning for AY 2011-2012*, Phnom Penh: Cambodia. (クメール語資料)
- Sideth S.D. (2004). *Strategies and Policies for Basic Education in Cambodia: Historical Perspectives*, International Education Journal Vol 5, No 1, pp. 90-97.
- UNICEF (1990). *CAMBODIA: The Situation of Children and Women*, Phnom Penh.
- 石澤良昭 (1996) 「歴史的背景」『もっと知りたいカンボジア』綾部恒夫・石井米雄編, 弘文堂, 1-23頁。
- 北川香子 (1996) 「歴史的背景」『もっと知りたいカンボジア』同上, 23-33頁。
- 上田広美 (1996) 「民族と言語」『もっと知りたいカンボジア』同上, 101-110頁。
- 内海成治 (1996) 「社会と教育」『もっと知りたいカンボジア』同上, 190-209頁。
- クロク ヴィチェト ラタ (2001) 「カンボジアの教師教育に関する一考察—制度的な発展

と養成基準―」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第48巻第1号、57-70頁。

KHLOK Vichet Ratha (2003) 「ポル・ポト後カンボジアにおける教育システム再構築に関する―考察―ベトナム化と再クメール化の過程に注目して―」『教育学研究』第70巻第3号、383-392頁。

前田美子 (2003) 「カンボジア―負の遺産を背負う教師たち―」『途上国の教員教育―国際協力の現場からの報告―』国際協力出版会、30-64頁。

北村友人 (2009) 「開発途上国の教育政策に対する国際機関の影響」比較教育学研究第39号、91-106頁。

羽谷沙織 (2006) 「カンボジアにおける教育開発 ―プロジェクトをめぐる住み分けと援助協調のポリテックス―」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論叢』第49号、1-18頁。

羽谷沙織 (2011) 「ヘン・サムリン政権下カンボジアにおける教育改革と教科書にみる国家像」『立命館国際研究 23-3』論説、137-157頁。

Study on Historical Changes of Educational System in Cambodia

– Characteristics of the System before Paris Peace Accords –

Chankea PHIN

This study describes the characteristics of Cambodia's historical education before Paris Peace Accords (PPA). The findings are briefed in the following four sections: firstly, prior to the onset of the French colonial, education had played a role in maintaining social structure and centering on the king. Furthermore, education had been forming religious and social values. More interestingly, preaching against social norms toward people was the role of the priest who was as teacher.

Secondly, during colonial period (1863–1953), elite education was carried out to support the colonial government through modernization of education. However, because of the fact that Cambodian people had continued receiving education in religious temple in line with the current situation, the fusion of modern and traditional system of education had been carried out. Thirdly, after independence from colonial rule, King Norodom Sihanouk focused on education reform but it was frustrated due to lack of human resources, essentially teacher. Later, education was disrupted and abolished by the extreme communist policy of Pol Pot regime (1975–1979) that caused Cambodia fallen into tragedy of civil war. Fourthly, after the cruel regime collapsed, reconstructing society through educational reconstruction is a symbol of peace and freedom, and local residents participate in constructing schools. After the PPA signed in 1991, Cambodia has started receiving foreign aids, then support and participation of community residents in school education have declined, thus Cambodia has become an aid reliance country.

This study demonstrates that religion has been integrated, through ages since pre-history till present, in Cambodian education. Both religious particularly Buddhist, and school show their crucial social roles in Cambodia society. They may be the only key to regain people's interest as well as participation in quality educational development.